

附属学校からのスタート

～創造と連携に向けて～

ポロニア

paulownia

創刊号

■創刊にあたってのご挨拶

附属学校からのスタート●谷川彰英……………1

■学校紹介

意欲のある子どもを育てる●堀 和郎……………2

新たなる中学校教育の創造を目指して●阿部生雄……………2

生徒も教師も自主・自律・自由をモットーに●海保博之……………3

視覚障害教育の新たな前進をめざして●飯野順子……………3

海外との繋がりを求めて●齋藤佐和……………4

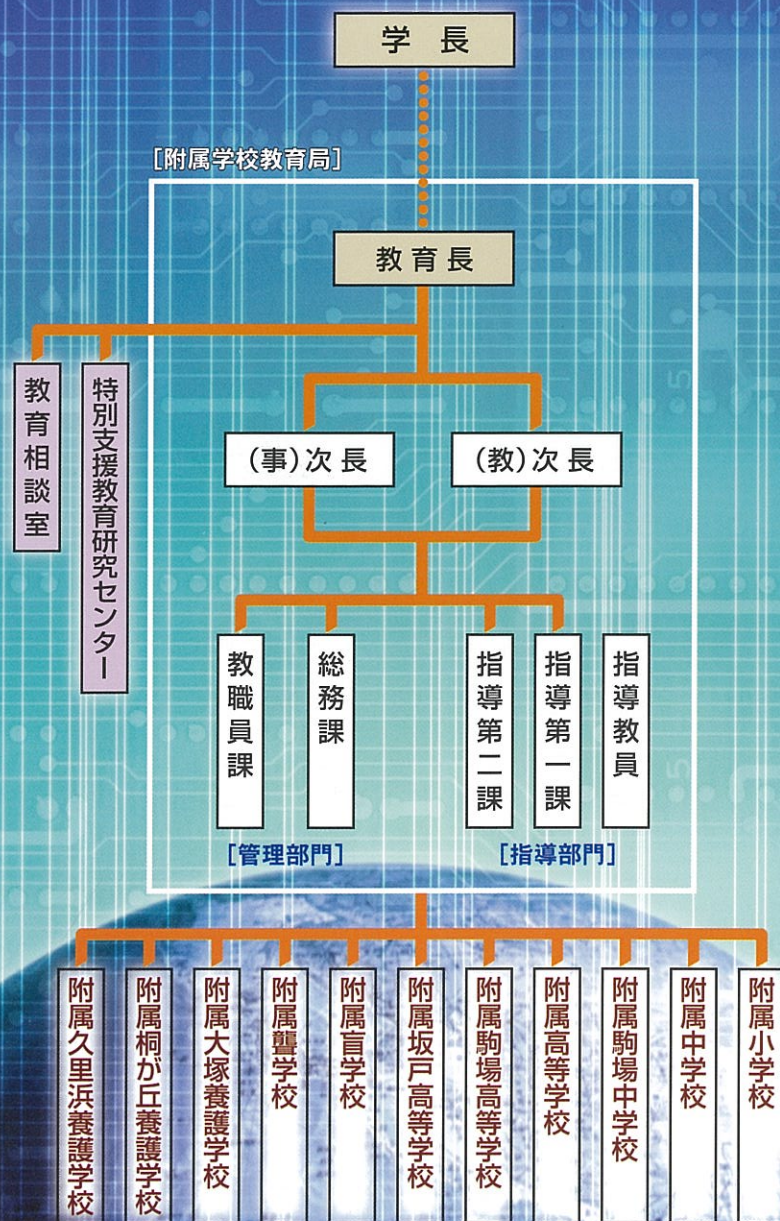
大学と附属障害教育5校の力を結んで●齋藤佐和……………4

■附属学校教育局プロジェクト研究

(平成16年度)の概要……………5

■平成16年度 附属学校教育局・附属学校研究発表会、研究大会、研修会等予定……………5

附属学校教育局の組織



●広報誌名「ポロニーア」の由来
「ポロニーア」とは、「桐」の属名であり、Paulowniaと綴る。本誌を「ポロニーア」と名づけたのも、筑波大学の紋章に「五三の桐」が使われていることに拠る。しかし、ポロニーアを付した理由が他にも存在する。近代西洋医学を日本に伝えたシーボルトは、日本において、桐が瑞祥の象徴と見なされ、皇室をはじめ高貴な家柄の紋所として用いられていることを知り、Paulownia(後援者のオランダのパウロウナ公妃に因む)こそが植物の桐のイメージを表現していると考え、桐の学名(Paulownia imperialis)に定め、パウロウナ公妃に献呈した。今後いつまでも、多数の読者に愛され続けることを願い、ポロニーアの記事来歴やエピソードに基づき、ポロニーアと命名した。

※附属駒場中・高等学校、附属坂戸高等学校、附属大塚養護学校、附属桐が丘養護学校、附属久里浜養護学校の学校紹介は次号に掲載させていただきます。



附属学校教育局教育長 谷川彰英
附属学校からのスタート

東京メトロ「茗荷谷」を降りて春日通りを越えると、その奥に筑波大学東京キャンパスがある。正門を通り抜けて正面の建物にはいると、そこが筑波大学附属学校教育局のオフィスになっている。

今年の4月に国立大学が法人化されたことに伴って、従来の「学校教育部」が改組されて「附属学校教育局」がスタートした。30年続いた学校教育部という名称に若干の未練はあったものの、国立大学の法人化という戦後最大の大学教育改革の渦の中で、附属学校の管轄組織として生まれ変わった組織である。本学の中では附属病院と並ぶ半ば独立した組織であり、児童・生徒数約4,500名、教職員数620名に及ぶ大きな組織である。法人化に伴って、附属学校に関するこのような大きな組織改革を行ったのは筑波大学だけかもしれない。

従来本学には附属小・中・高等学校と附属障害教育学校の計10校があったのだが、法人化に伴って新たに久里浜養護学校が本学の附属学校として再出発した。

茗荷谷にある東京キャンパスは明治36年、それまで御茶ノ水にあった東京高等師範学校が移ってきて以来、実に百年にわたって日本の近代教育を担ってきた歴史を引き継いでいる。

戦前にすでに設けられていた附属学校には、現在の名称では、附属小学校、附属中学校、附属高等学校、附属盲学校、附属聾学校、附属大塚養護学校があり、戦後に新しいニーズによって設立された学校は、附属駒場中・高等学校、附属坂戸高等学校、附属桐が丘養護学校、そして附属久里浜養護学校に及んでいる。本学の附属学校の特色は、普通学校と障害教育学校がほぼ同じ規模で設置されていることである。周知のように、いずれの学校もその世界では全国の教育をリードしてきた学校である。

しかし、いくら過去の栄光を讃えようともそれだけでは附属学校の未来は開かれない。本広報誌を刊行しようと思いついた動機は、法人化の波の中で、全国的に附属学校関連の動きが鈍く、ともすれば見逃されてしまいそうになっているという危機感に基づいている。

筑波大学内部でも、附属学校に関する情報は極めて少ないといわざるを得ない。しかし、例えて言う、マスコミに載る情報としては、筑波大学本体よりも附属学校関係の方が多くかもしれない。それほど筑波大学の附属学校の実践は社会の注目を集めている。

『ポロニーア』には、各附属学校の動向はもとより、法人化以降の附属学校のあり方を示唆するような記事・論考をどしどし掲げていきたい。全国の附属学校への発信拠点としての機能を果たしていくことを期待している。

意欲のある子どもを育てる

附属小学校長 堀 和郎



本校は、筑波大学の附属小学校として、初等教育の理論と実践についての先進的な研究と実証を使命としている。

目指している教育は、児童一人一人の個性を尊重し、人間性豊かな心身の発達と育成である。この目標のもとに、子どもたちは、生き生きと学習活動に取り組んでいる。今回は、学校の行事について紹介したい。

〈入学式〉毎年4月8日が入学式である。四学級160人の子どもたちが、待ちに待ったこの日を迎える。

桜吹雪の中を、父母、祖父母など500人にも及ぶ付き添いととも参列する。

〈清里合宿〉5月の3週目から、3泊4日の山梨県清里での合宿生活が始まる。皮切りは、4年生である。この合宿は、1学級ずつで実施される。

自分たちで、合宿生活のプログラムを作り、自分たちの手で運営される。学校からも、家庭からも干渉されずに、心身共に解放された4日間を送る。

以後、3年生、6年生、5年生の順に11月初頭までリレーされていく。

〈富浦合宿〉7月末、6年生が千葉県富浦で、3泊4日の合宿生活を送る。この合宿では、全員2キロメートルを遠泳する。毎年、体調不良の子どもを除いて全員が完泳している。緊張の合宿生活である。

〈運動会〉親子、教師共に熱くなるのが、運動会である。全校を紅白の2チームに分け、徹底的に勝負にこだわる。上学年の子どもたちは、下学年の子どもたちを指導する。6年間の勝ち負けをすべて覚えているくらい徹底している。

〈雪の生活〉1月末、5年生が長野県志賀高原で、3泊4日のスキー合宿をする。この合宿では、全員が何らかの等級のメダルを取って帰ることになる。厳冬の零下10度以下での合宿生活は、子どもたちにとってはなかなか得られない体験である。他にもジャンボ遊び、修学旅行等の楽しい行事がある。



新たな中学校教育の創造を目指して

附属中学校長 阿部生雄



本校は明治21年に東京高等師範附属尋常中学校として創立されてから116年の歴史を誇る。昭和24年に東京教育大学附属中学校、昭和53年に筑波大学附属中学校となり、今年、大学と共に法人化された。本校の校訓は「強く、正しく、朗らかに」で、自主自立の精神、強い意志と逞しい実践力、積極的な創意と探求心、広い視野に立つ正しい判断力、明朗率直で誠実な態度、集団生活における協力と責任、人間愛に基づく思いやりの心といった資質を育てようとしている。また、本校は筑波大学における教育に関する研究に協力すると同時に、今年改組された附属学校教育局と連携して、わが国の教育を先導する中学校教育の実践と研究を発信しようとしている。現在、法人化への移行に伴い、中期目標・中期計画に掲げた大塚地区の附属小・中・高一貫教育の実現を目指している。「小中一貫教育」や「中高一貫教育」は、公立学校や私立学校などで行われているが、12年間を見通しながら、一貫教育を行おうとしているところは他にない。小学校・中学校・高等学校という3校が存在する大塚の附属学校でなければ、この研究を推進することはできない。こうしたテーマを追求しながら全国のモデルとなる学校づくりを展開していく予定である。また学生の実習や現職教員のリカレント教育に対してもさらに重要な貢献を果たそうとしている。

さらに、法人化に伴い、わが校は、国際理解教育の充実を目指そうとしている。本校では、グローバル化の進む時代を見据え、従来の教育の充実に加えて「国際社会に通用するリーダーの育成」、「国際社会に適用しうる中学校教育のカリキュラムの先導的研究」を掲げている。各国の教育内容の検討や各国の教育使節団の受け入れなど、大学の「教育開発国際協力研究センター」と連携しながら積極的に進めていこうとしている。



生徒も教師も自主・自律・自由をモットーに

附属高等学校長 海保博之



〈はじめに〉1学年6学級、男女同数共学校である本校の教育方針は、自主・自律・自由をモットーとし、全人的人間の育成という教育精神のもとに、さまざまな教育活動が行われている。教科教育においては体系的かつ基本的な知識・技能・態度の修得を、特別教育活動においては計画的、実践的、協力的人間の育成と生徒の個性の伸長を目標にしている。

〈全人格的な学習をめざして〉学習は全人格的な営みであり、それをめざすところは、高度で生き生きとした知識の習得にあるばかりでなく、人がそれぞれ対等な人間と認め合い、協力しつつ共同体を築いていけるような個性を育むことにある。進路指導もこうした教育の延長に位置づけられており、生徒たちが学校生活を通じて確立された自主性と主体性に基づいて、自主的に進路を選択できるように指導している。本校では、大学合格という目の前の結果だけにとらわれることなく、将来の職業選択を見据えた進路選択ができるように、担任と進路指導部の教員を中心に、1年生の時から生徒の主体的な進路設計ができるような指導が行われている。2年生には、社会で活躍中の卒業生を講師に招き、それぞれの職業でどのような学問が必要なのか、また、どんな人材が求められているのかについても、講義をお願いしている。

〈各種の行事は生徒の自主的な運営で〉部活動に関しては、主将責任者会議において、生徒部の教員と各部の主将とで話し合いを行い、活動計画や問題点の解決方法などについて決定している。

行事に関しては、文化祭(桐陰祭)、スポーツ大会はもとより、対外的にも対学習院の定期戦(今年54回目)、開成高校とのボートレース(今年76回目)など多彩で、それぞれ生徒の自主的な考えで運営されている。昨年再発足した生徒会活動も徐々に軌道にのりつつある。



視覚障害教育の新たな前進をめざして

附属盲学校長 飯野順子



当時の一流の文化人による運動が実り、明治9年皇室からの御下賜金により、「楽善会訓盲院」として本校はスタートしました。歴史と伝統を誇る本校は、長い間日本の視覚障害教育の中心校として重要な役割を果たしてきました。わが国唯一の国立の盲学校として、現在においても視覚障害教育の各分野で、重要な役割を果たしています。これまでにたくさんの有為な人材を輩出してきていますが、現在も社会の各分野で本校の卒業生が活躍し、後に続く者の道を切り開き、視覚障害者の社会的地位の向上に貢献していることは、私たちの誇りとするところです。本校は幼稚部(3歳～)、小学部、中学部、高等部(普通科、音楽科)と職業課程の高等部専攻科(鍼灸手技療法科、理学療法科、音楽科)を持ち、幼・小学部については自宅からの通学生のみですが、中学部以上は全国から生徒を受け入れています。そのため寄宿舎も設置されています。

特殊教育から特別支援教育へ移行するにあたり、障害児学校の果たす役割はさらに大きくなっていますが、本校における外部への支援は、0歳からの乳幼児を対象とした早期教育相談や、小学校通常学級に在籍する視覚障害児を対象とした通級指導など、早い時期から実施されてきました。また昨年からは中学部でもサマースクールを実施するなど、ここにきてさらに充実してきています。本校高等部における大学進学を希望する視覚障害学生への支援は全国の視覚障害学生の大学への道を切り拓いてきました。そしてこの面での本校に対する期待は、今も大きいものがあります。また国内だけでなくとどまらず、アジア各国から留学生を受け入れたり、各国へ鍼灸手技療法の普及をはかるための支援をしたりするなど、国際的な面にも広がっています。



海外との繋がりを求めて

附属聾学校長 齋藤佐和



本校は、明治8年を創立の年としていますので、平成17年には創立百三十年を迎えることになります。この間、築地、小石川そして現在地の市川市国府台と移り変わり、また学校名も幾度か変わり現在に至っています。

現在、幼児・児童・生徒数は273名、全国の聾学校106校の中では最も大きい聾学校です。また、寄宿舎には遠く鹿児島から北海道まで43名の児童・生徒が家族と離れて生活しています。指導には、寄宿舎指導員とともに舎監（教諭）が当たっています。

今年3月には、最後に残された高等部棟、体育館の改修工事が終わり、寄宿舎、体育館を含め全校舎が新しく生まれ変わりました。幼稚部から高等部専攻科まで一貫教育を標榜しながらも、各学部がそれぞれ独立した校舎になっていますので、その利点を生かして、各発達段階に応じた聴覚障害教育を推進しています。その成果は、高等部卒業生の大学進学率や社会での活躍に現れています。

昨年9月、本校はフランス国立バリ聾学校と姉妹校提携の協定を調印しました。世界でもっとも古い歴史を持つバリ聾学校と130年の歴史を持つ附属聾学校、また、両校にはそれぞれの国を代表する国立聾学校と、共通することの多い両校です。高等部生徒による文通、電子メールやそれぞれの作品などの交換、将来的には相互訪問なども行いたいと思っています。また、国際的貢献として、平成18年10月に「第9回アジア太平洋地域聴覚障害問題会議・第40回全日本聾教育研究大会」の一部を担当することになりました。主会場は、文京シビックホール、椿山荘ですが、本校では、聴覚活用と補助的コミュニケーション手段の活用などを基本として、学力の向上と社会的自立を目指した附属聾学校の教育を授業公開と授業研究会を通して紹介いたします。



大学と附属障害教育 5校の力を結んで

特別支援教育研究センター長 齋藤佐和

特殊教育の分野では、現在「特別支援教育体制」への大きな制度転換について議論が進行中です。

平成16年4月、附属学校教育局の関連センターとして設置された本センターは、大学の研究開発力と附属障害教育学校5校の教育実践力を結ぶ連携の拠点となって、障害児教育に関わる資産を継承しつつ、新たな制度が求める研究の開発を推進します。本センターの誕生により、心身障害学系を中心とする大学の研究部門と附属障害教育学校間の連携的活動が強化され、障害児教育における「専門性の継承・発展・発信」や障害教育学校における「センター的機能の構築」において成果を上げ得ると考えています。

本センターの機能は、研究開発機能、教員研修機能、理解啓発・交流機能に大別されます。研究開発のテーマとして、障害のある子どもとその家族に対する相談支援システム開発、通常学校支援システム開発、指導法等の開発の3本柱を設定し、具体的計画を策定しています。現職教員を主な対象とする教員研修機能については、センター主催の短期型（免許法認定公開講座など）、中・長期型（特別支援教育コーディネーター養成など）研修の他、センター・附属学校共催研修などを企画・実施します。夏休み中に開催した免許法認定講座7講座には本年度全国から約700名の受講者があり、ニーズも本学への期待も高いことを実感しました。附属学校との共催研修企画等、センター事業についてはHPを（<http://www.human.tsukuba.ac.jp/~sserc/>）ご参照ください。

センター・スタッフが大学教員（3名）と附属学校教員（完成時5名、本年度は2名）で構成される点でもユニークなセンターです。障害のある人に対する教育・福祉の場では、関連職種間の連携は時代のキーワードであり、本センターも望ましい多様な連携の在り方を追究していきます。



附属学校教育局プロジェクト研究（平成16年度）の概要

附属学校教育局では、大学教員と附属学校教員の共同の組織的研究として、右記の六つのプロジェクト研究があり、月一回のペースで研究会を開催しています。教育研究機関としての附属学校の特長を生かした組織ならではの取り組みです。

| | | |
|----|---|--|
| P1 | 「児童生徒の心身の健康と学校生活における支援の在り方の研究」 ◎石隈利紀・熊谷恵子・田中輝美 山本淳子 | 教育現場において、不登校、いじめ、LD（学習障害）などで多くの児童生徒、及び教師・保護者が苦戦している。児童生徒の学校生活に関する問題の解決が急務である現状を鑑み、児童生徒の心身の健康及び学校における支援の在り方を研究する。 |
| P2 | 「附属学校におけるカリキュラム開発に関する実際研究」 ◎飯田範子・江口勇治・金子 守 | 小・中・高を有する筑波大学の特色を最大限に生かしたカリキュラム開発の実際問題と課題を検討する。具体的には、各教科教育、教科外活動の系統的・発展的指導のためのカリキュラム開発を目指し、カリキュラム開発と研究組織の実態から実際の課題をまとめる。 |
| P3 | 「個別の教育支援計画の開発に関する研究」 ◎篠原吉徳・飯野順子・千田捷熙 西川公司・熊谷恵子・山中克夫 | 特別支援教育の策定、実施に向けて、本研究プロジェクトでは、「個別の教育支援計画」開発・作成実施、評価を通して、「個別の教育支援計画」のモデル構築とその実証的な検討を行う。 |
| P4 | 「筑波大学及び附属学校における教職教育の在り方の研究」 ◎江口勇治・金子 守・飯田範子 | 一般大学としての筑波大学及び附属学校における教職教育の在り方等について継続的研究を進めるとともに、教職実習の在り方について検討する。 |
| P5 | 「発達段階に応じた情報教育のカリキュラム研究」 ◎服部次郎 | 新学習指導要領において、すべての児童生徒に情報活用能力を育成することが定められた。しかし、小・中・高の各発達段階に応じたカリキュラム研究が不十分であるので、各校種を擁する本学附属学校の特性を生かした研究を行う。 |
| P6 | 「インクルージョン教育をめざした交流教育の研究」 ◎飯野順子・篠原吉徳・石隈利紀 千田捷熙・熊谷恵子 | これまで通常学校や特殊学校間で様々な交流がなされてきたが、双方向的・継続的・組織的な面からは十分とはいえなかった。今後、附属11校という特色を生かし、交流教育からインクルージョン教育をめざした研究・実践を検討する。 |

平成16年度 附属学校教育局・附属学校研究発表会、研究大会、研修会等予定

附属学校教育局と各附属学校合同での研究発表会、及び各校の研究テーマを深めるための公開研究会を、下記の日程で開催する予定です。是非ご参加下さい。 *各附属学校が会場となります。（附属学校教育局を除く）

| 主 催 | プ ロ グ ラ ム 名 | 日 程 |
|------------|---|---|
| 附属学校教育局 | 筑波大学附属学校教育局・附属学校研究発表会（会場：附属小学校） | 平成17年2月26日（土） |
| 附属小学校 | 学習公開・初等教育研修会 | 平成17年2月17日（木）・18日（金） |
| 附属中学校 | 第32回研究協議会（講演「生徒の教育要求に即するカリキュラムの開発」、公開授業、研究協議会） | 平成16年11月12日（金） |
| 附属高等学校 | 第54回教育研究大会 | 平成16年12月4日（土） |
| 附属駒場中・高等学校 | 第31回教育研究会 先駆的な科学者・技術者を育成するための中高一貫カリキュラム研究と教材開発～高大連携・共同をつくりながら～（公開授業、研究協議会、パネルディスカッション） | 平成16年11月26日（金）・27日（土） |
| 附属坂戸高等学校 | 新しい総合学科教育と研究開発科目「起業基礎」の提案（仮題） | 平成17年2月17日（木）・18日（金） |
| 附属盲学校 | 視覚障害教育研究協議会 | 平成17年2月19日（土） |
| 附属聾学校 | 聴覚障害教育担当教員講習会 関東地区聾教育研究会「自立活動」研究協議会 | 平成16年11月16日（火）～19日（金） 平成16年12月10日（金） |
| 附属大塚養護学校 | 公開保育「知的障害児の保育実践」（講演「幼児期からの学齢期に向けての具体的対応」） 研究発表協議会 「個のニーズに応える特別支援教育の深化と充実をめざして」 —アセスメントの側面から—（教育部・仮題） —地域支援モデルの構築—（支援部・仮題） | 平成16年10月1日（金） 教育部 平成17年2月10日（木） 支援部 平成17年2月11日（金） |
| 附属桐が丘養護学校 | 肢体不自由児のための特別支援教育の実践 —「個別の教育的ニーズ」に対応する小中高一貫の教育計画と評価— | 平成17年2月9日（水）・10日（木） |
| 附属久里浜養護学校 | 自閉症児教育実践研究協議会「自閉症児のための教育課程の開発」 | 平成17年2月25日（金） |

■アテネパラリンピック出場選手及び成績

第12回パラリンピック・アテネ大会が開幕、9月28日まで136の国・地域から参加した選手約3900人による熱戦が繰り広げられている。

筑波大学からは、在校生4名（秋山里奈・加藤祐司・酒井喜和・斉藤晃司）、卒業生7名（浅井三重子・福原良英・河合純一・矢野繁樹・広瀬誠・大城竜之・鈴木徹）、寺西真人コーチが参加している。

柔道（視覚障害）では男子60kg級の広瀬、男子81kg級で加藤が**銀メダル**を獲得。競泳では河合が男子100mバタフライ（視覚障害1）で**銀メダル**、男子400m自由形リレーにも出場し、**銅メダル**を獲得、さらに男子200m個人メドレー（視覚障害1）では**4位に入賞**した。

自転車タンデム1000mでは大城が**4位入賞**。

ゴールボールには浅井が出場し、現在予選グループ3位。今後の各選手の活躍が期待されている。（日本時間24日午前現在）



《編集後記》

「吾輩は猫である。名前はまだ無い。」世界広し、と雖も、無名の猫の中で、この猫ほど高名な猫はいません。では、広報誌についてはどうでしょうか。この度、筑波大学附属学校教育局初代教育長、谷川彰英教育長のご発案で、附属学校教育局は「広報誌」を発行することになりました。しかし、附属学校教育局の広報誌ですから、夏目漱石の「猫」のように、無名のまま発行することは許されません。そこで、編集委員が鳩首会議を開いて、どのような名前が適当か、を検討しました。

谷川教育長が、広報誌の発刊を着想された背景、動機、意図、そして広報誌に託される思いや願いに照らしてみても、誌名に、筑波大学のシンボルである「桐」を使わないわけにはいかない、との結論に至りました。ただし、「桐」は、附属学校等が出版する定期刊行物の名前に、既に用いられてもいます。したがって、重複、混乱を避けるためにも、日本語の桐は使わないのが賢明、との意見が大勢を占めました。日本語が使えないというのであれば、外国語に、その源泉を求めなければなりません。

そして、たどり着いたのが、「**ポローニア**」です。ポローニアというのは、paulowniaと綴る、「桐」属の総称である英語です。ロシアのPaul I世の娘（女帝エカテリーナII世の孫娘）、Anna Paulovna（アンナ・パウルlovna）の名にちなむ、と英和辞典（小学館ランダムハウス英語辞典）にはありました。彼女は、オランダ王室に嫁ぎました。Paulovnaは、近代西洋医学を日本に伝える一方、日本文化をヨーロッパに紹介したシーボルト（Philip Franz Von Siebold）の後援者でもありました。シーボルトのパトロンであったことが、桐がpaulowniaと命名されたことと関係しています。Paulovnaに由るせいか、名前の響きもやわらかいですね。皆様から愛される呼称である、とお思いになりませんか？

「ポローニア」という名の有る「筑波大学附属学校教育局広報誌」が、名の無い「猫」を凌ぐ日が来ることを願っています。「桐」は成長の早い樹木として知られますので、この日が来るのは、意外と早いかもしれません。開学記念日にあわせて、記念すべき創刊号を刊行させよう、と作業を進めてきました。原稿執筆のご依頼を申し上げた方々の多大なご協力も得て、期日に間に合わせることができ、ホッとしているところです。

読んで楽しい、しかも役に立つ情報が満載の誌面づくりに努めたい、と思っています。どうぞご期待ください。と同時に、皆様のご支援によって、ポローニアは、充実、発展を遂げるものと確信します。今後、絶大なご支援を賜りますよう、お願い申し上げます。（篠原吉徳）

ポローニア
paulownia

創刊号

発行日……平成16(2004)年10月1日

発行者……附属学校教育局教育長 谷川彰英

発行所……筑波大学附属学校教育局 広報誌
ポローニア編集委員会

〒112-0012 東京都文京区大塚3-29-1 電話&FAX 03-3942-6801

編集委員長……篠原吉徳

編集委員……千田捷熙・飯田範子・山本淳子・平川和人

デザイン……スピーチ・バルーン

印刷……広 研